

# 福生市における戦後の社会教育

田村光男

昭和40年代の青年サークル

## はじめに

市史編さんの現代部会調査員として社会教育を担当することになったものの、十分な調査活動ができないまま時がたってしまった。そんな所へ編集専門委員の川鍋先生から「みずくらいど」への執筆を依頼されたわけである。

担当者としては、現代の社会教育については「終戦後」から「公民館時代前史」までを扱うつもりでいる。また、扱う範囲が非常に広範囲に及ぶために大原野を前にして果然としているような心境でもある。

今回は、手持ちの資料を元に自分自身が関わってきた青年活動について述べてみることにした。

私が福生市の社会教育に関わりを持ち始めたのは、昭和四十四年の十二月であった。福生市の教育委員会では、昭

和四十年から、新成人による実行委員会を組織し、成人による「成人のつどい」を実施してきた。昭和四十四年にも翌昭和四十五年一月十五日の「成人のつどい」に向けて実行委員会が組織されたのである。

その時の実行委員会は、福生中学校在学当時、生徒会長であった井上啓氏、副会長であった秋山充典氏を中心に福生中学校出身者を母体とし組織されていた。十一月からつくり始められた実行委員会の末席に私も十二月に入ってから加わることになったのである。

準備も進み、昭和四十五年を目前にしたある日、私は教育委員会事務局で、加藤有孝社会教育主事から「一九七〇年代を迎えるにあたって感想は？」と問われた。その時、「七〇年代と言っても、一つ年が改まったに過ぎない」と答えた私であったが、今になって振り返ってみると、やは

り一つの時代の始まりだったのである。

それは、どの様な時代であったのか。ここでは、七〇年代前半を中心に、六〇年代から七〇年代にかけて、つまり昭和四十年代の福生の青年サークルについてまとめてみたい。

### 福生市の変容

昭和四十年代は、東京オリンピックの翌年から始まることになる。所謂、高度経済成長の高揚期である。

福生市そのものにも、社会的な変化が目立ってきた時期であった。当時、福生市は「町」であったが、農村から都市へと少しずつ変容をみせていた。昭和三十八年に入居が開始された熊川団地は、五階建て六百七戸の福生で初めての大規模な集合住宅であった。その年の十二月には加美平地区の区画整理事業も具体化され、昭和四十一年には一、〇四二戸の加美平団地が建設された。

#### 〔資料 1〕

福生町の最北部加美平、青い麦と雑木林におおわれていたこの土地にも、今年、人々がおしよせてくる。ふくれあがった東京の人口、そこからあふれでる人々を加美平はうけとめるのだ。あらゆる糧を生み出したこのやわらかな豊かな土地もやがては多くの建物が林立し、人々に踏みかためられていくことだろう。この土地に親しみこの地にまみれて生きてきた農家の人

で、だれがこのことを想像していたであらうか。

（『広報ふっさ』昭和四十一年六月号）

このような人口増加の流れの中で、福生町は、昭和四十年七月一日に総人口を三〇、〇二二人とし、昭和四十三年の新市制実現全国期成会結成を経て、昭和四十五年七月の市制を実現していった。

福生市の青年サークルの歴史は、この昭和四十年代前半に大きく変換し、七〇年代（昭和四十年代後半）に変質していくのである。

### 昭和四十年代前半の青年サークル

昭和四十年代前半は、戦後再建された青年団が消滅していった時期であった。その戦後青年団は昭和二十一年に発足した。

#### 〔資料 2〕

八月十五日以後、長い戦争から解放された喜びと敗戦という混乱した生活の中へ戦地から青年達が復員してきて、生活を作り上げていく運動を始めた。そうした青年達が青年団クラブに集まり、これからの生き方を論じ、青年団の再建を話し合った。山崎良之助、笹本保治、細野利夫、岸 明、井上重男、竹島益男、橋本孝蔵氏等が中心になり、永田クラブで新青年団の結成準備会が開かれ、十一月三日に福生第一小学校の講堂で発会式

が行われた。こうした青年の動きを援助した教師に浜中伴蔵氏がいた。(略)

初代団長に橋本孝蔵氏がなった。こうした福生の動きに刺激されて、熊川青年団が結成されたのが十二月である。熊川青年団では、第二小学校教諭、並木嶋雄氏が関わっていた。(略)十月十六日、両青年団の合併となり福生青年団として発足し、昭和二十一年橋本孝蔵氏が団長、二十二年には熊川の青年団長であった森田正氏が団長をつとめた。(『公民館10年のあゆみ』)

このようにして再建された戦後青年団も、昭和四十三年には実態を失ってしまった。

### 〔資料 3〕

青年団は、地域とのつながりも団の目的もほとんどなくなった団体になってしまった。行事も新しいものは考えられない。それを改善していこうという熱意を示す者など現れない。団員の生活意識の中から、地域社会とのつながりはすべて忘れられているとしか見えないようになった。

四十三年の春を迎える頃、森田貞之団長は後任団長さがしにかけずりまわった。現況を知る者は、その役を逃げる。

森田団長は腹を決めた。自分が信頼できる後輩が引き受けてくれないなら青年団を解散する。

解散会を桜の咲くころやろうよ、との話もあったが、その後何の集まりもないまま、福生町青年団はちりぢりになってしまった。(『ふっふっ子』第二集)

青年団にかわって新しい青年サークルができていったのが昭和四十年代前半である。教育委員会では、「昭和四十年から成人式は、福生青少年問題協議会を通して各地区で成人を迎える青年を数名、成人式の実行委員に選出してもらい、その実行委員の手で成人式を実行するということ」にした。その実行委員会が解散されたあとで、成人者にたいては教育委員会からサークル結成の呼掛けがあり、昭和四十一年五月に発足したのが、「土筆の会」である。「土筆の会」は、「青年の心の交流と主体性の確立」をめざした自主学習サークルであり、その後には発足していった青年サークルの中核をなしていった。

翌四十二年二月には、その年の「成人のつどい」実行委員会を母体として、「さんしょうの会」が誕生した。「土筆」と「さんしょう」は、交流会を持ち連繫を深めていく中で、地域の青年の幅広い交流をはかるため「青年の集い」の開催を計画した。この計画は、前述のような状態にあった「青年団」と、その年の九月に発足した「黒百合山岳会」にも計っていったが、「土筆」・「さんしょう」と「青年団」・「黒百合山岳会」の考え方の相違は深く、結局「黒百合山岳会」は不参加、青年団は名目のみの参加という結果になった。

当時、教育委員会のフォークダンス教室から発生したフォークダンスクラブがあった。「土筆」と「さんしょう」

〔資料 4〕

第一回青年の集いプログラム（昭和42年）

11月4日（土）前夜祭

福生第一中学校校庭

エレキバンド演奏

ベアロックス・ジュニア

ザ・ダイヤモンド

青井裕太とロンサム・カントリードリッカーズ

フォークダンス

福生町フォークダンスクラブ

青年の歌

11月5日（日）

青年の集い

西多摩自治会館

講演

「世界の青年・日本の青年」 講師

秋山ちえ子

討論会

「青年は何を為すべきか」 講師

石川常太郎町長

小学校校長

中学校校長

教育委員会

など13名

音楽の夕べ

東京経済大学フォークソング同好会

法政大学工学部マンドリンクラブ

福生町ハワイアンクラブ

ダンス

ザ・ダイヤモンド

福生町ハワイアンクラブ

は、そのフォークダンスクラブを誘い、その年の十一月に第一回「青年の集い」を開催し、成功をおさめた。西多摩自治会館（現市民会館の前身）での集いと、福生第一中学校校庭での前夜祭に集まった青年は五百名を数えた。

つくしの会長であり、集いの実行委員長でもあった松坂直人氏は、プログラムの挨拶文のなかで、集いの成立ちについて次の様に述べている。

〔資料 5〕

ここで主催団体は、福生町青年団体とあります。これは「つくしの会」「さんしょうの会」「フォークダンス」「青年団」の連合体であって、この四団体はより青年らしい主体的な活動を行っているものです。後援は読売新聞社・福生市教育委員会です。この様な催し物に対する福生町役場からの協力は大きなものがあります。同時に広告協賛という形で我々の「青年の集い」に対する理解と積極的な協力にたいしては、我々実行委員一同大いに勇気づけられました。

このように、教育委員会とはもとより町長を始めとする町当局の理解と、広告協賛という形での三十六もの地元商店及び事業所の協力によって青年の新しい動きは支えられていた。しかし、一般町民には、青年の動きに変化がおこっているという意識はなく、青年団の活動の延長

であるくらいの見方が大方であった。したがって、「集い」の成功の陰には、青年団のそれまでの実績とそれに対する評価があったと言っても良いであろう。「わかいし（若い衆）がやっているんだから。」という感覚である。しかし、青年は確実に変化しており青年の活動も変化していったのである。「青年団」から「自主学習サークル」への変換である。

この年には、八月にフォークダンスクラブと青年団のあいだで、活動場所をめぐる衝突も起こっている。昭和三十一年に青年団が青年クラブを処分して以来、青年の活動拠点は、同年三月に完成した生活改善センター（現第二庁舎）に移っていたが、狭いために使用の優先をめぐって、建設資金を一部負担している青年団と新興サークルの間で衝突がおこったのである。この問題は、昭和四十三年の「町政を聞く会」・昭和四十八年の「ふっさ・公民館を創る市民の会発足」の伏線になっていくのである。

### 「青年団」から「自主学習サークル」へ

昭和四十三年に入ると、集い後一旦消滅したフォークダンスクラブがフォークダンス愛好会として再生し、黒百合山岳会は内部分裂により衰退していった。

その様な中で、青年団体間の連絡協議会をつくろうという機運が盛り上がり、同年五月、「福生市青年団体連絡協

議会」が発足した。所属団体は、「つくしの会」「さんしよの会」「フォークダンス愛好会」「青年団」ということであつたが、当時、本団と二支部しか活動がなくなり衰退していた「青年団」は正式加盟を保留したまま解散していった。

### 〔資料 6〕

三十九年（昭和）に、団員は総勢百五十名ぐらいとなつてしまった。支部組織も一支部から九支部まであるうち、半分ぐらいは名目の存在となつてしまった。リーダーに人を得ない支部から、しだいに解散の運命をたどつた。

四十一年には熊川地区の支部は無くなつてしまった。五支部（志茂・牛浜）六支部（長沢）七支部（永田）八支部（加美）がのこっていたが団員数は二十名が最高の支部。小さいところは十名に満たなくなつた。

本団の行事としては体育大会など不可能となり、卓球大会、松風園（老人ホーム）の慰問、祭礼、クリスマスパーティーなどいとなつた。町教委と共催の青梅の青年の家での研修会には幹部が参加していた。〔「ふっさっ子」第二集〕

### 〔資料 7〕

現在の青年団は、地域社会の青年を対象とした青年団体で、地域社会の青年交互の親睦をはかり、社会生活における必要な人間形成を目的とした集団です。

福生町青年団は地区によって別れ、第一支部から第九支部まであり、その上層部にある本団（総務）によって構成されてい

ます。

現在は第三支部、第五支部（志茂一・志茂二・牛浜一・牛浜二・原ヶ谷戸）六支部（長沢）七支部（永田）が主に活動しており、男女共一応規制された年齢、中学を卒業する年齢から男子二十五歳、女子二十四歳の退団する年齢にたつする団員一二〇名程を有しています。

四月に行われる入退団式及び定期総会をかきりに本団を中心として、各支部が計画した行事に従って活動が始まります。

各支部は毎週一回の集会を持ち、互いの悩みを話し合ったり、雑談したり次に行われる行事の準備をしたりします。各支部集合日は違いますが時間は夜八時から十時までです。

主な行事は新入団員歓迎ドライブまたはハイキング、支部對抗卓球大会、盆踊り、祭礼、キャンプ、リーダー研修会、十月には福生町青年団体ソフトボール大会、集中登山、バスハイク旅行、ダンスパーティー、スケートバス、ダンス講習会等の行事を行い、そのほかに老人ホーム慰問、青梅青年団等の交流、又支部においては、ボーリング大会、誕生パーティー、女子は手芸、生け花等をおこなっている所もあります。

（昭和四十二年 第一回青年の集いプログラム）

昭和四十年代の前半は、「青年団」が衰退し、「自主学习サークル」が発生し始めた時期である。つまり、青年サークルが「農村型」の「青年団」から「都市型」の「自主学习サークル」へ転換していった時期なのである。

「青年団」は、土着性の強いものである。資料7にあるように、青年団への入団資格は、中学校卒業と同時に得ら

れることになっている。つまり、小学校を卒業し中学校に入るように、中学校を卒業すれば青年団に入ることである。当然の流れになっていたのである。大人社会・地域社会への入口として、だれしもが通過する通り道だったのである。しかし、四十年代に入るとその道は当然のものではなくなっていた。

資料1で述べられているように、福生は農村から都市へと変容をみせはじめていた。町内の農地は急速に減少し、人口構成のグラフも、別表1（広報ふっさ昭和四十二年四月号）のように都市型を示していた。昭和四十年には、中学卒の高校進学率は、全国平均七〇%、東京都八六・八%（全国最高）を示し、短大を含む大学生の数は一〇〇万人を突破した。高校へ大学へそして都心の職場へ。青年の生活の基盤が福生からはなれていくに従って、青年団の基盤もくずれていったのである。

全国的にみても、農村からの青年・壮年層の流出は増加しており昭和三十八年には「三ちゃん農業」という言葉が生まれ、兼業農家も四十%をこえるまでになっている。中学校卒業生は「金の卵」世代であり、集団就職という形で都市へ流出した。

福生からも流出はあったが、工業都市化を進めつつあった福生へは、むしろ流入の方が多かったのである。

〔資料 8〕

福生町及青梅市、羽村町の一体は首都圏整備法による市街地開発区域（衛星都市）として指定を受ける事になっていて、既に羽村地区には工場の進出がみられております。この結果、従来の農業生産地区から工業都市地区として生まれ変わるわけです。

〔広報ふっさ』昭和三十六年十二月号〕

〔資料 9〕

第一期（昭和四十年迄）事業は主として加美地区（現・加美平）及び武蔵野（現・武蔵野台）の工業団地の地域約三十二万坪であります。この計画が完成いたしますと都市計画街路、栄通りの延長、柳通りの延長及び工業地区の二十五米街路等も整備され、高層住宅が建設され工業団地には優秀な工場が誘致され、小中学校、公園、下水等が整備されて、福生町の面目が一新されます、更に町としては、この計画と併行して、福生駅東口西口一帯の整備につき目下計画中であります。

加美地区の開発と同時に福生駅周辺の中心部を如何に整備するかも重大な事業でありますので、慎重に計画を進めて行きたいと思ひます。また公社（東京都新都市建設公社）は、これを第一期事業として続いて昭和五十年を目標に第二期、第三期の事業を当町の他地区にも進めてゆく事になります。

〔広報ふっさ』昭和三十六年十二月号 瀬古町長〕

〔資料 10〕

福生都市計画による武蔵野台工業地区に十八社の進出がきまり、現在、各社の建設が着々と進んでいます。すでに建設も終わり、活動し始めているものもありますが、今年中にはほとんど

どが完成し、武蔵野台は生産の響きが鳴り渡ることでしょう。美しく整備された秩序と調和の中を疾走する車は、明日の社会を象徴しているようです。

〔広報ふっさ』昭和四十三年一月号〕

新しい青年サークルである「自主学習サークル」は、このような新しい福生の中から誕生していったのである。土着の中から生まれたのではなく、土着していききたい気持ちが「自主学習サークル」を生みだしていったのである。武蔵野台から羽村にかけて建設されていった工業団地には、いろいろな地方から青年が集まってきた。そして、福生にも多くの青年が流入者として居住することになった。

駅前商店街でも店員が増え、大規模商店の店員寮に女性流入者が多く入寮するようになっていったのである。このような故郷を離れ一人で生活している青年、中学校を出て以来地域というものを忘れていたふっさ子、そんな青年達が仲間を求めてつくっていったのが「自主学習サークル」なのである。昭和四十年代の青年サークルをリードしていった「つくしの会」のメンバーであり、第三回青年の集い実行委員長を務めた荒木悟氏は、当時の流入青年の気持ちを次のように述べている。

〔資料 11〕

(略) ふと、五・六年前の自分を顧みると、じつにつまらない毎日を過ごしていた事に気づきます。朝起きたら仕事に行き、終わって部屋に帰ればテレビを見るのが常だった。休みの日は、映画、ボーリング、パチンコ。そして夕方飲みに行く程度。

(略) 自分で考えるという事を忘れていた様に思います。「しかし、流入者である私に友達を作るという事は難しい事でした」こんな私の毎日は、どこかにボカッと穴の開いた、何故か満たされない空虚な生活の連続だった。仕事を終えてから自分の余暇生活を何とかして充実した毎日を送りたい、そう思い続けました。(略) 自分で自由に使える時間で、仕事で疲れた肉体を、精神的疲労をどれだけ回復できるかで、明日への精力の原動力になって来るのではないだろうか。そんな事を考えながらもどうにもならなかった私に、そうです、今から四年前に、そのあしがかりとなるサークルに入る事が出来たのです。何も話すことの出来なかった私が、話せる様になっただけではなしに、毎日の余暇生活が充実してきたのです。この会の中には、私と同じ流入者が幾人もいました。私は山形ですが、他に長野、福島、新潟、埼玉、栃木、それに東京でも氷川から福生に来た人と、福生在住の人が集まってできたサークルなのです。(略)

(昭和四十四年 第三回青年の集いプログラム)

実行委員長挨拶)

「つくしの会」に始まる昭和四十年代の自主学習サークル(自主サークル)は、「資料12」に示すように、その後も次々と誕生していった。

ただ、これらのサークルの活動期間はさまざまである。

その状況について、「青年の集い」プログラムのサークル紹介・青年団体宿泊研修会資料をもとに〔資料13〕にまとめてみた。サークル名は略称で示す。

### 昭和40年代後半(70年代)のサークル

「つくしの会」以降のサークルは、同窓会・OB会的なスタートをしているものが多い。成人式の実行委員会からできた「さんしょうの会」「芥子種」「赤トンボ」「なめこの会」は、福生に中学校が一校だけの時代の福生中OBが中心であり、その傾向は特に強い。同じ様に成人式の実行委員会を母体としている「ジヨナサン」「ビッシュップ」「すぎなの会」「ゆうかり」も、同様である。また、フォークソングは、中学生・高校生の集まりであり、吹奏楽は福生中のOBであった。

このような集まりは、青年が社会人になってゆく過程でしだいに衰退していった。成人式の実行委員などは学生が多く、サークルを結成して一・二年すると卒業・就職を迎えてその生活環境は一変する。それぞれが、地域から離れ思い思いの道を歩いてゆくことになり、サークルどころではなくなってくる。この状況はかつて青年団が歩んだ道と同じである。そのような中で、比較的長く活動できたサークルは、ふた通りの特徴を持っている。

一つは、「地域の勤労青年を仲間引き込んで行くこと



## 〔資料 12〕

昭和 41 年	つくしの会	昭和 40 年度成人
昭和 42 年	さんしょうの会	昭和 41 年度成人式実行委員
昭和 43 年	福生フォークダンス愛好会 フォークソング愛好会	
昭和 44 年	サークル芥子種 はぐるまの会 河童の会 (スポーツサークル) 福生吹奏楽愛好会	昭和 43 年度成人式実行委員 昭和 43 年度働く青年学級 町営プールのアルバイト学生
昭和 45 年	赤トンボの会	昭和 44 年度成人式実行委員
昭和 46 年	なめこの会 F・R・C 劇団 ポッツォ	昭和 45 年度成人式実行委員 福生郵便局の職場サークル
昭和 47 年	ジョナサン	昭和 46 年度成人式実行委員
昭和 48 年	ビショップ	昭和 47 年度成人式実行委員
昭和 49 年	すぎなの会 サークル '74 (ナナヨン)	昭和 48 年度成人式実行委員
昭和 50 年	ゆうかり	昭和 49 年度成人式実行委員

## 〔資料 13〕

	(昭和)	42	43	44	45	46	47	48	49
	青年団	○							
総合 サークル	つくし	○	○	○	○	○	○	○	○
	さんしょう	○	○	○					
	はぐるま			○	○	○			
	芥子種				○				
	赤トンボ				○	○			
	すぎな								○
専門 サークル	フォークダンス	○	○	○	○	○	○	○	○
	フォークソング	○	○	○	○	○	○		
	河童			○	○	○	○		
	吹奏楽				○	○	○	○	○
	ポッツォ					○	○	○	○
	ビショップ							○	○
	'74 (ナナヨン)								○

ができた」サークルである。新しい仲間を集め、同窓会・OB会的な集まりから脱皮することができなかったサークルは次第に消滅していったのである。

もう一つは、「活動内容のはっきりしていた」サークルである。総合サークルの活動内容は、規定されたものではなく、まさに総合的でありどのようなものでも良いわけである。したがって、人が数人集まれば総合サークルができることになる。しかし、活動内容をどのように設定していくかは、サークルの存亡に関わる問題であり、そこが不明確で仲良しグループにとどまってしまったサークルは長続きできなかつた。「つくしの会」は、この条件をみたし昭和十五年まで十四年間、活動を続けたが、他の総合サークルの活動は短いものが多かった。その点、専門サークルはどこから見ても活動内容がはっきりしていた。

昭和四十年代後半（七〇年代）は、この総合サークルにかわって専門サークルの進出が目立った時期であった。昭和四十五年（一九七〇年）にできた「赤トンボの会」は、その時期を象徴している。

#### 〔資料 14〕

赤トンボの会は上図（省略）に示したように、男子八名（準会員二名）女子六名（準会員一名）から構成され、他のサークルと密接な関係をもっている訳で、その活動も影響を受けるこ

とはもちろんである。では、なぜ今までこの会が解散せずに不思議に生き長らえて来ることが出来たかという点、ひとつには会が情報伝達の機関であること。これは特に就職している人がそのように感じているらしい。又、一つには、かけもちをしている人にとっては、週に一回は必ず福祉会館に足を運ぶことに慣れてしまつて、赤トンボの会に、活動らしき活動がなくても、出て来ることがそう面倒になっていない様子であること。そんなことからこの会が三年目を迎えている様である。（略）

決められた活動をせずに、雑談をし、体育館（一小）に行けばボールを持ち出して、他のことをしたり、そういうことを各自が当り前の様に感じていた。そんな訳で会長が辞めたいと言いつつ出した。その時は、これからは、自分自身が本当に、やってみたいことは何かを、真に追求して、それをやってみようということ、その場は済んだが、それ以来、真に欲求しているものが何かを各人が見つけようとしないうちの様子である。十四名中十三名の者が同年齢ということで、一人の者がある状況（例えば卒業して就職）におかれると、残りの者もそろそろ、その様な立場になって来ることの宿命の様なものの為に、これからは、細々と活動して行く様である。

（昭和四十六年度青年団体宿泊研修会資料・秋山充典会長）

「赤とんぼの会」は、成人式実行委員会メンバーによつてつくられた同窓会的な総合サークルであった。また、この会の構成メンバーには、「河童の会」（昭和四十四年発足）の井上啓会長、「吹奏楽愛好会」（昭和四十四年十二月発足）の田村光男会長、浜野美広副会長、「劇団ポッツォ」

(昭和四十六年六月発足)の市川勉会長と、「吹奏楽愛好会」「劇団ポッツォ」のメンバー数人が含まれていた。中には、二つの専門サークルに関係する者もいて、この四団体は二重三重に関わり合っていた。

つまり、それぞれの専門性の追求と同窓会的なつながりが未整理な状態で混在していたのが「赤トンボ」だったのである。特に「劇団ポッツォ」は、市川氏の熱意によってできたものではあるが、「赤トンボ」があったからこそ設立することができたといっても良いであろう。その「赤トンボ」は、「ポッツォ」になりきることはできなかった。

総合サークルである「赤トンボ」は消滅し、その一部から発生した専門サークル「劇団ポッツォ」が残ったのである。その後成立した総合サークル「ビショップ」(昭和四十八年)「サークル74(ナナヨン)」(昭和四十九年)は、次第に専門性を強め、専門サークルとして長期に活動することとなった。「ビショップ」は、昭和四十九年四月十三日に御岳山で「野鳥を聞く会」を開催してから、「野鳥観察」を専門とし、「サークル74(ナナヨン)」は昭和四十九年九月からの「放送劇の台本」作りをきっかけに「人形劇」を専門とするようになった。

昭和五十年三月二十九・三十日に青梅青年の家で行われた「福生市青年団体宿泊研修会」(主催・福生市教育委員会、福生市青年団体連絡協議会)に参加した青年サークル

は七団体、うち専門サークルは五団体であった。「ビショップ」と「ナナヨン」からは、専門性を次第に明らかにしてきたその一年間の活動報告があり、総合サークルの長所・短所なども討議された。

青年の集いの「音楽の夕べ」では、第三回まで大学の音楽部など外部に出演を依頼していたが、第四回(昭和四十五年)からは専門サークル主体でプログラムを組めるようにもなっていた。

### 福生市青年団体連絡協議会

このように、福生の青年団体は、昭和四十年代の前半に、青年団から自主サークルへ変換し、昭和四十年代の後半に、総合サークルから専門サークルへ変質していったのである。その四十年代の青年サークルをリードしていったのが「つくしの会」であり、「つくしの会」を中心に結成された「福生市青年団体連絡協議会(青連協)」である。四十年代の青年サークルは、すべてこの青連協に加盟していた。

### (資料 15)

#### 青連協の紹介

昭和四十三年五月に発足し、青年団、つくしの会、さんしゅうの会、フォークダンス愛好会が連繋して、「福生町に於ける青年の団体・サークル間の交流と発展を円滑に促進せしめ、更

には地域社会の文化的向上を図る事」を目的として発足した。しかし昨年从今年にかけて青年団の急速な衰退は著しく現在全く活動がない状態である。そして青連協は実質的にはサークル連絡協議会となり、その後サークル芥子種、フォークソング愛好会、はぐるま、河童の会の誕生をみ、発展しております。

### (第三回 青年の集いプログラム・昭和四十四年)

資料12は昭和四十年代に「青連協」に加盟していた青年サークルである。資料13に示したものはその活動状況で、四十二年から四十七年までの○印は、そのサークルが秋の青年の集いの時点で、四十八・四十九年の○印は、年度末の宿泊研修会の時点で活動していたことを示している。つまり、各年度の実質的な青連協加盟サークルである(四十九年の「すぎな」「ナナヨン」は発足直後)。

青年協の年間活動の主なものを昭和四十六年度の記録から見ると、次のようなものである。

- 46・4 総会
- 5 サークル対抗スポーツ大会
- 11 青年の集い 主催 青連協 後援 福生市教委
- 11 青年の集い 慰労バスハイク
- 47・2 青年団体宿泊研修会 主催 福生市教委 共催 青連協

この他、各サークルの代表者による定例会が、毎週水曜日にもたれ、情報交換や運営会議が行われた。また、各サ

ークルの発表会の後援、成人式実行委員会への協力も全サークルをあげておこなわれた。発表会では、総合サークルの一人一人までが、受付から照明にいたるまで影の力を發揮してくれたのである。年度によっては、自主研修会を持ち、「社交ダンス」「機関誌編集」などの研修をしたこともあった。

外部との関わりでは、昭和四十三・四十四年に西多摩青年の集い(都教育庁西多摩出張所主催)に各サークル単位で参加し、昭和四十六年一月には、吹奏楽愛好会が立川社会教育会館の呼掛けによる三多摩音楽団体連絡協議会(三音連)結成に参加している。

青連協は青年サークルの連合体として福生市の社会教育団体に認定されていて、現在も活動を続けている。そして、その代表一名が「青年代表」として福生市の社会教育委員に任命されてきた。

### 公民館の時代へ

昭和四十年代が「自主サークルの時代」だとすれば、昭和五十年代は「公民館の時代」と言える。昭和五十年五月に、市議会に仮称市民会館及び公民館建設特別委員会が設置され、十一月には基本設計が決定して、翌々年の昭和五十二年六月十一日に公民館がオープンしたのである。

昭和四十年代は、その「公民館の時代」への前段階であ

り、青年サークル及び「青連協」が、社会教育施設・文化施設を求めて研究を進め、行政当局へ建設を要望していった時代でもある。昭和四十三年には、「町政を聞く会」を開き、公民館設置の要求をしている。そのとき町当局から回答のあった施設は、回答通りに昭和四十五年に建設された。福祉会館である。二・三階が社会教育施設として使われることになったが、結局は福祉会館の間借りであり、青年サークルとしては使用しにくい面も多かった。

昭和四十七年には、つくしの会・吹奏楽から文化施設建設要求の動きがおこり、青連協のなかに施設研究会が組織された。文化施設に関する総合的な学習会であり、国立公民館の見学を行ったりしながら「公民館三階建て構想」などの学習を深めて行った。

昭和四十八年には、「つくしの会」の村野雅義氏を中心として「ふっさ・公民館を創る会」が結成され、施設要求の運動は青連協の枠を越えて発展していった。このような「青連協」の運動は、入れ物（施設）の建設だけではなく中身の充実（専門職の配置・市民活動の活発化）も目指したものであり、「公民館の時代」を作り上げる上で、幾分かの役割を果たしてきたと言える。

また、「青連協」は、いろいろな機会に、青年サークルの結成や入会を呼びかけてきたが、昭和四十八年一月に新成人向けに「つながりをもちませんか？」と題したサーク

ル紹介のパンフレットを発行したり、教育委員会と共催で「ヤング教室」（昭和五十一年一月）、「若い市民の講座」（昭和五十一年十月）を開くなど、教育委員会とも連繫しながら、福生の社会教育の充実に貢献してきた。

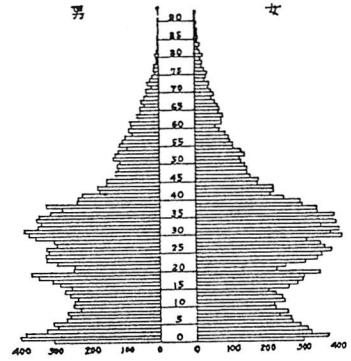
### おわりに

このような青年の動きが「公民館の時代」という形で実を結んでいくことができたのは、「熊川親子読書の会」の「図書館」建設要求や、「文化連盟」による「文化施設建設の」早期予算化の要望など、他の市民団体の動きとうまく連繫できたこと、昭和四十五年の市制施行以後、四十八年社会教育課設置、図書館条例制定、四十九年社会教育委員会への「社会教育基本計画の策定について」諮問、など行政当局の社会教育充実化に向けての流れに合わせていったことによる。

しかし、本当に「公民館の時代」をつくりあげたのは、昭和三十七年に福生で初めての社会教育専門職（社会教育主事）として赴任された野沢久人氏、昭和四十三年に同じく社会教育主事として赴任された加藤有孝氏の地道な努力であるといえよう。

その努力が青年を育て新しい時代をつくって行ったのである。その象徴が、三人目の社教主事の松坂直人氏である。松坂氏は、「つくしの会」会長「青連協」会長として四十

別表1 人口ピラミット 42.2.1現在



人口増加状況

年度	増		減		増加人口
	出生	転入	転出	死亡	
40	718	3,437	2,423	139	1,593
41	590	3,316	2,424	118	1,364

年代の青年をリードしてきた。そして、昭和四十八年七月に社教主事として行政側に入ったのである。また、昭和五十四年には、「ビショップ」の会長として福生に野鳥観察を根付かせた伊東静一氏も社教主事として採用されている。昭和四十年代とは、「行政が青年を育て、青年が行政を揺り動かした」時代といっても良いのではないだろうか。

なお、本稿については福生市社会教育主事の加藤・松坂御両氏に御教示いただいた。末筆ながら感謝申し上げます。

(たむら・みつお 福生市史現代調査員 現在、瑞穂町立瑞穂中学校教諭)